I-11

障害をもつ子どもに配慮した排泄環境改善のための基礎的研究
さまざまな障害特性からみた排泄環境の実態

Fundamental study on the excretion environmental improvement in consideration for children with disabilities
The current state of excretion environment as seen in a variety of disabilities

○植田 瑞昌[1]，八藤後 猛[2]
*Mizuyo Ueda[1], Takeshi Yatogo [2]

It is a purpose to know the present conditions of the excretion at various handicaps. Clarify the problems of excretion environment. We conducted a questionnaire survey on parents of children with disabilities. As a result, the child does not have a failure of excretion were using diapers. In addition, whether excretion can be on their own was involved in communication skills. Besides, children with physical disabilities and intellectual impairments were more diapers utilization. We understood that the problems of the excretion environment varied according to the characteristic of the obstacle.

１．研究の背景と目的

近年,障害児を取り巻く環境は著しく変化している.とくに医療の進歩により日本の新生児死亡率の低さは世界一の水準である.一方,低体重児の出生率は増加し,重度重複障害が残る児は漸増している[1].また,特別支援学校では医療的ケアを必要とする児も増加している[2].そのような中,在宅で生活する重度重複障害児においては,さまざまな理由により通園・通学以外の外出(買い物やレジャー等)が困難な場合が多く,その要因の一つとして外出先での排泄環境があげられている[3].さらに,障害の有無にかかわらず「おむつ離れ」の年齢が年々遅くなる傾向があり,さまざまなニーズに合わせた排泄環境を整えることは急務の課題といえる.しかし,乳幼児・学童期においては排泄機能や運動機能,知的能力などは発達段階にあり,能力に応じた排泄環境を整備することが難しく,どの成長段階でどのような配慮が必要か十分把握されていない.

よって,本研究では,さまざまな障害特性からみた排泄方法や排泄環境の現状を明らかにすることを目的とする.

２．調査方法

調査方法は,アンケート調査とし,配布方法は,特別支援学校(東京都内 6 校,横浜市内 1 校),こども発達支援センター・療育センター(東京都内1カ所,横浜市内5カ所),及び,父母の会,自主サークル等から保護者へ配布し,郵送により回収した.

調査期間：2016 年 6 月～8 月
配布数　：2,378 部
回答者数：729 名(男 473 名、女 255 名、不明 1 名)
回収率　：30.6%

３．調査結果

３－１．対象児・者の基本属性

対象となる障害児・者の年齢は 1 歳から 56 歳まで(平均年齢 13.1 歳),身長は 62.0 ㎝から 186.0 ㎝まで(平均身長 131.0 ㎝),体重は 6.0kg から 115.0kg(平均体重 30.8kg)であった.主たる介助者の性別は 685 名(94.0%)が女性であった.

本稿では,障害の種別を「1.肢体不自由のみ」「2.知的・発達障害のみ」「3.重複障害のうち肢体不自由と知的・発達障害のみ(以下「3.重複障害(肢体・知的発達)」)「4.不自由がない重複障害のうち,視聴覚もしくは内部障害と知的発達障害(以下,「4.重複障害(視聴覚内部等・知的発達))」「5.それ以外の分類」の 5 種類に分類し集計を行った.その結果,全体の 43.3%(316 名)が「3.重複障害(肢体・知的発達)」となり,次いで「2.知的・発達障害のみ」が 38.1%(278 名)であった.

また,医療的ケアが必要な児・者は,194 名(26.6%)で,その内訳(複数回答)は「痰の吸引」が最も多く 123 件あった(Fig 1).

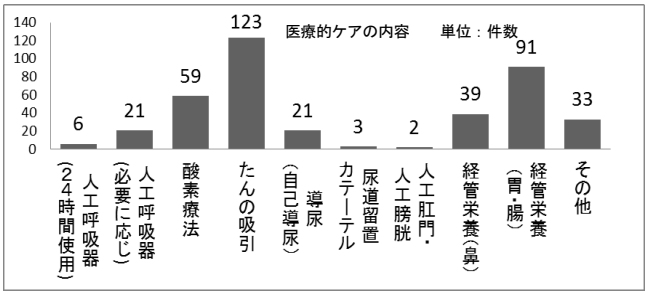

Fig 1 : The contents of the medical care

３－２．排泄障害とおむつ使用の有無

排泄の自立度については,意思表示の方法が「口話・ことば」の方が、「自分でできる」割合が 41.0%と高い.一方,「身ぶり・指さし・サイン」では「部分的に介助

１：日大理工・院（後）・建築　　２：日大理工・教員・まち

が必要」な割合が 44.0%である(Fig2).また,排泄障害の有無では, 437 名(61.2%有効回答数 714 名)が「排泄障害はない」と回答しているにもかかわらず,「おむつ使用の有無」については有効回答数 721 名に対して 467 名(64.8%)が「おむつを使っている」と回答した.さらに,「排泄障害がなくおむつを使用している」人は有効回答数 710 名に対して 223 名(31.5%)であった.なお,本稿では排泄障害を生活モデルの障害と捉える [4] .

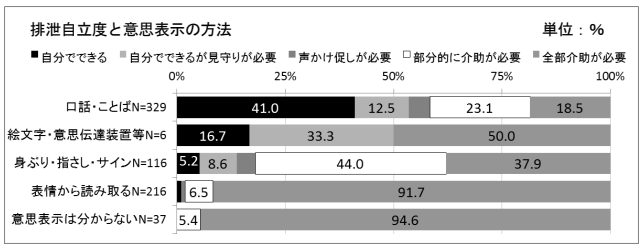

Fig2: Excretion and communication skills

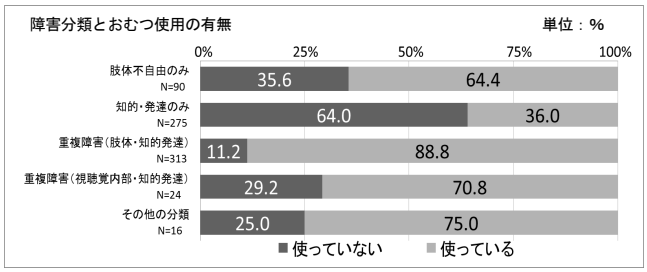

Fig3: Classification of disabilities and Use of diapers

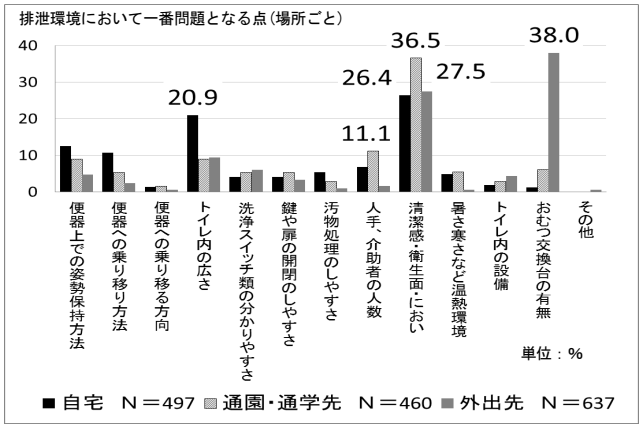

Fig4: Most of the problems of excretion environment

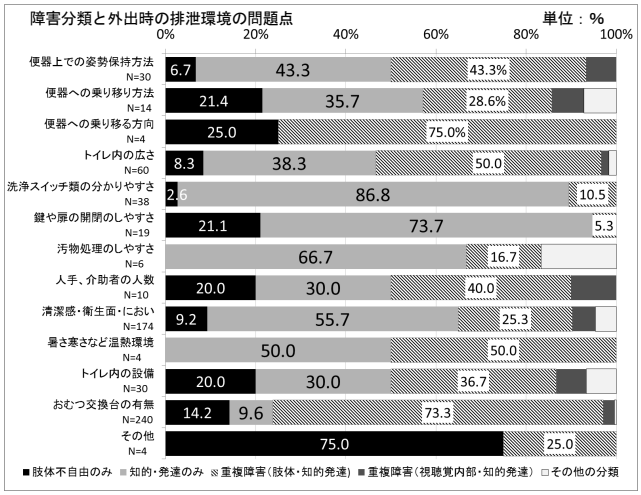

Fig5: Problems of excretion environment in the whereabouts

さらに,障害分類とおむつ利用の有無について分析を行うと 3.重複障害(肢体・知的発達)のある児・者が最もおむつ利用率が高いことがわかり(Fig3),意思表示や身体機能との要因も大きい.

３－２．排泄環境に関する問題点

排泄環境における問題点を場所ごとにあげたところ,自宅内における問題では,26.4%が「清潔感・衛生面等」,次いで 20.9%が「トイレ内の広さ」を重視している.また,通園・通学先等の施設では,36.5%が「清潔感・衛生面等」をあげ,外出先では 38.0%が「おむつ交換台の有無」をあげている(Fig4).

さらに,外出先の排泄環境の問題点を障害分類で集計すると「洗浄スイッチ類の分かりやすさ」をあげた回答者のうち 86.8%が「2.知的・発達障害のみ」となり,「おむつ交換台の有無」を問題としてあげた回答者のうち 73.3%が「3.重複障害(肢体・知的発達障害)」であることが明らかになった(Fig5).

４．まとめと考察

障害の特性により排泄の状況や問題となる点が異なるため,とくに 2.知的・発達障害のみの児・者においては「わかりやすさへの配慮」や,汚いという概念が難しい場合の「衛生的配慮」が重要となる.さらに,おむつの利用率が高い 3.重複障害(肢体・知的発達)のある児・者においては,「おむつ交換台の有無」が排泄環境に最も重要であり,自由回答においても「成長に伴い乳幼児用おむつ交換台が利用できなくなった」,「外出先での大人用おむつ交換台がほとんどない」といった問題が多数あげられていた.

今後は,排便と排尿別にみた排泄環境における問題点,姿勢や使用している用具・設備との関係を分析する予定である.

参考文献

[1] 前田浩利:「NICU から始める退院調整＆在宅ケアガイドブック」，メディカ出版, 2013, p 008-009
[2] 文科省：「特別支援学校における医療的ケアを必要とする児童について」，調査報告書,2011
[3] 植田瑞昌：第 18 回福祉のまちづくり学会全国大会：「重症心身障害児（者）の外出先での排泄環境に関する事例報告と問題点」，梗概集，2015
[4] 西村かおる：学研,「コンチネンスケアに強くなる排泄ケアブック」，2011.